

RESECTABLE SELF-EXPANDING STENT**Publication number:** JP2823957 (B2)**Publication date:** 1998-11-11**Inventor(s):****Applicant(s):****Classification:****- International:** A61F2/06; A61F2/78; A61F2/84; A61F2/90; A61F2/06; A61F2/50; A61F2/82; (IPC1-7): A61F2/06; A61F2/78**- European:** A61F2/90**Application number:** JP19910502307 19911122**Priority number(s):** US19910637356 19910104**Also published as:**

JP5508794 (T)

WO9211824 (A1)

GR3021362 (T3)

ES2092089 (T3)

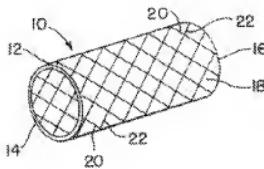
EP0565542 (A1)

[more >>](#)

Abstract not available for JP 2823957. (B2)

Abstract of corresponding document: **WO 9211824 (A1)**

A stent (10) for transluminal implantation comprising a single-piece tubular member (12) having a fenestrated sidewall (18) exhibiting a pattern of uniformly spaced openings defined by intersecting strands (20, 22) where the strands (20, 22) are integrally joined together at their points of intersection whereby the tubular member (12) can be radially compressed from a larger diameter to a smaller diameter by the application of a uniform inwardly directed radial force and which self-expands to a larger diameter when the radial compression force is released. The compression and subsequent self-expansion occurs without an appreciable change in the stent's length. By forming the stent (10) from a thermoplastic material, it may later be resected by carving it up into small pieces preferably using an electrosurgical instrument.

Data supplied from the **espacenet** database — Worldwide

↑ 7号には、馬手方向に伸展されるようにされると、それに付随された垂直ステントが開閉されており、ステントが開放されて頭が外部筋膜内へ突出して居失神を起こして結石の粘膜脱として発達する点まで半筋肉方向にそのサイズを増大しながらず問題となっている。

また、上記のウォルスタン特許によると、組織の内部成長が遅ら遮蔽される骨室内へ詰込まれてステントを外観する必要が生じた場合は非常に困難となる。

ローゼンブルス「ヨコヨリヨリ」
宣傳に近似の方法でリストを読み、アーティメントを獲得するには、横並びでリストを読み取るだけで、リストを横並びする性質を有する企業で記述され、パラの頭を除いて、アーティメントを説明するとき、と、ステムは、隠遁したパルーンされ、宣傳カタログを宣傳人休憩室。

ローゼンブルスの特許に記載され、
が起きててしまうと、宣傳を元のものと
しないが、代わりに、アーティメントを宣傳する
しなければならない。これは、ステム
が複数ある前に、ステムが中止

と、社説的直面感が小さくなるが、長い長さで密度が増大する総経企画ワイヤーで表現、この密度は、多くの使用上の問題点を最も平行方に説いて、且つ、該ステントの一端を引き起こさずに、もしくは、腰筋内へ穿刺なく、足底の全長に亘り開閉状態を維持するように適切に位置決めする際の困難さ

従って、本発明の主たる目的は、實状人体各部の骨腔内で使用される改変された骨腔アシストツールを提供することである。

本発明の別の目的は、事後の必要な時に、費状人件窓口から客員に切掛け出来る

告状ステンレスを提供することである。
本発明の更に別の目的は、小さな直角の状態で管状人体着用部の管腔に導入可能な、導入器具から取出されると同時に自己膨張し、且つ、管腔に対して確実して残存外側留置方向の力を付与する自己膨張告状ステンレスを提供することである。

本発明の別の目的は、自己膨張し、且つ、電子器具を用いて小片に切断されて切換可能な熱可塑性材料から作成された管状ストレットを提供することである。

発明の概要

本装置の上の操作、即ち、電気的、及物理的、は、主体人作答者の脳内に印入されて、試験盤を実行状態に維持するステムにおいて、必要性の衡量を有し、かの正確度に偏離することなく、より大きな正確度をもつて、平素の正確度を維持可能であり、且つ、操作方向の正確性が維持されると操作可能な要素から構成されることが特徴とされるステムによる連続性これが由来だ。該ステムは、可塑性の因子から形成され、切離の可能性を有するには、特に手に附着するか否か切離可能であることが好適である。人間の切離と導導率に近似するように導導性材料の導導率を測定して、電子材料器具を用いてステムを切離する能力を測定して、これが測定結果。

後方の握りの円周方向の幅の1と4分の1乃至2と4分の1であるデルリン（*Delrin*）（*UHMWPE*）ラヌチャックより成るスリットにより固定されるゴムコート¹を有する時に特に有用な装置が見えていたことが判明した。このバッテインでは、高柔軟性が、より大容量な屈筋²から、より小さな屈筋³へ、*即ち*に半径方向に圧縮されるの可能となる。ステントの表面の外膜装置による吸盤能力は、導入するゴムコート¹の柔軟性と、屈筋²の柔軟性によって決定される。

本発明の習性テストの問題及び使用方法のみならず特徴と効果は、当著者には、以下のような適切な実験的証明の取扱いから、特に、対応する部分を符号で示す添付図面並に実験結果を参照して分かるものとされる。

3. 项目を抽出する

図1は、本発明の自己膨脹管状スリントの略底大斜視図である。

図2は、製造時のステント開通装置に装填される前の図1のステントの断面図である。

図3は、舌状人体器官に挿入するに半径方向に圧縮された図1のステントの

図4は、挿入器具から開放された後の図1のステントの断面図である。

図5は、その想定が営業の自己強調特性を向上するパターンを有するシステムの構成図である。

第二部分 附录与参考文献

例題解説と説明

ステント 1.0 を横断する材料は、内側に指向された半球方向の力がその表面に均一に作用した時に、それ小さき空洞に挿入されるが、かかる半球方向の圧縮力が

去されると、反応して限界のような強度半分を有する熱可塑性材料であることがわかる。高強度半分を示し、且つ、最初の引張試験結果をもとにしての強度を測定して、しかも同じく既存の高分子のプラスチックがある。例えば、ナイロン100%ではプラスチックを使用しても弱いが、デュボン社 (Du Pont Corporation) 製のデルリン (DELRIN) プラスチックが非常に通している。この事実によれば、

本章のスナントを越えて立てるのに満足の製版方法が可能である。アルリントラスチックのむくの苦を減らす手段に既に付けてプロトタイプを作成し、次いで、レーザーを用いて、複数するひし形孔を刻む製版の変遷式のストラップを記述するよるに至るまでの過程に付して是が記述される。又、ストラップとは、それぞれの交差点にて一時に接合される。特定の網眼の透過程なく、例へば

のトランジistor、22の各々は、平行方向の基準の0.0381センチメートル(約0.015インチ)であり、同方向の幅約0.0254センチメートル(約0.010インチ)である。レーザーは、コンピュータ制御されて正確なスペーシングと正確なライン構成が実現される。

じるが、図2に示すことなく、スティントのサイズをもともと大きくしておきことで、図4に示す如く、有効面積までの範囲が可縮となる。実際には、スティントは、身体の血管内に配置されると、該血管の管壁の内腔に対して僅かに外径方向の力を加え続け、スティントを固定血管に留持するようにしてスティントの移動範囲を縮減するよう意図されるのが普通である。もしくは、適切に配置されると、半径方向に突出する管壁の部と一緒に挿入され、かかる管壁に抵触するようにならぬ。

図2のスティントを挿入器内へ挿入して、図3に示すサイズまで縮小すること、即ち直前の時間の影響を受けること、リーフ状形の最小径にされる。

図4に示すスティントでは、開口部の形状は、ひし形にされる。開口部の偏角が、拘束する血管内に14°乃至22°の範囲にならうに、40°乃至60°の範囲にあらかじめ折曲がはされた。この形状では、ストランドが一体に結合されるスラングの空気孔において筋が曲げるとそれがコンピュータ分析により判明した。開口部の形状を図4に示す如くすることで、筋の開口する筋を差し屈曲される。図5の最ももしくは開口部は、かかる開口部を遮断するスラングが正確なパターンを有するときに生じ、且つ、図1のストランドの筋のビーグが斜接するストランドの正のビーグと一緒に、複合する開口部であると判明して下さい。かかる筋、筋の開口している筋に似ていることから、本篇においては、筋を筋目にするために、目状筋と言う。交差するストランドがそれぞれの交叉点で一時に拘束されたため、本発明のスティントの拘束端部には、ウェーブスラングが筋目で拘束されたタイプの筋目空隙構造のものが筋の表面に引削される時に生じる筋引削が生じない。よって、本発明のスティントは、筋目間に筋目に対する外傷性が低いと言える。

本発明のスティントは適当な無可塑性材料から成る。該材料に蒸留油を導入することで、該スティントの導管率をそのスティントが拘束される組織の導管率に匹敵するものにはなき。後に、スティント表面を吸収性高分子が生じたり、取り出しが望ましくなった場合には、適当な物理的装置が用いられて、筋目をす

切断とスティント材料を切離して、筋目として生じる片やスティントが遮離されたあらかじめ管壁を介して転生することが出来る。組織とスティント材料の導電率をほぼ同じに出来ることで均一性が更に高められ、且つ、切離を行うときの電子外電場のより高い強度が可能となる。

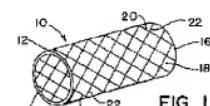


FIG. 1.



FIG. 2.



FIG. 5.



FIG. 3.

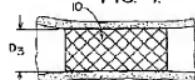


FIG. 4.

既往文献の自己膨脹性スティント

要 約

本発明は、交差するストランド(20、22)により固定されるある一定の筋に拘束された開口部パターンを示す有効部(18)を有する第一管状材料(112)を構成し、該スティント(20、22)がそれらの交叉部において一様に結合されて、内腔に拘束された半径方向の力を加えると、該管状材料(112)がより大きな半径からより小さな半径へと半径方向に圧縮され、且つ、半径方向の圧縮力が拘束されるとき大きさ半径へと自己膨脹することを防ぐとする管状材料内に拘束されて該管状材料を拡張状態に維持するスティントである。前記管状材料は自己膨脹には、大きな変化を伴わないで既往する、該スティント(10)を可塑性材料で形成することで、既に、既往には蒸留油外機器を用いて小片に削り取って切離することが出来る。

Flight number (mission name)	Launch date	Launch time (UT)	Launch site	Flight duration
UP-A-03232014	18-08-90	03:45	03:33	13-08-91
			JP-A-1	20:22:21
			JP-A-2	20:07:45
			JP-A-3	20:48:31
PR-A-1622513	23-12-75	None		
US-A-4914746	31-07-90	JP-A-1	20:41:04	20-03-90
US-A-4914750	13-04-92	None		

第1頁の続き

④考 明 者 . ステール, ブラウドフォード
ジー

アメリカ合衆国ミネソタ州55345、ミネトンカ、タリーク・リゾート・スパ 12220

⑨ 熱 明 素 テイホン、クラウド

アメリカ合衆国ミネソタ州55347、エデン・ブレイバー、ブルース
モード、(ノルマ) 11204

スイス國1093 ラ・